

座間古説

作者: 不詳

成立: 明和年間(1764-1772)



解題

Keyword

- 民撰地誌
- 座間宿
- 座間入谷

江戸時代、明和年間(1764-1772)に書かれた座間地域の地誌。天保10年(1839)の『相中留恩記略』(#24)や同12年の『新編相模風土記稿』(#23)に先立つこと約70年、近世中期までの座間の伝承や記録を伝える民撰地誌。

■ 成立と諸本

本史料は、座間市立図書館市史編さん係によって『座間古説(座間市史資料叢書1)』として翻刻・刊行され、一般に知られるようになった。同書に収録されている解題「座間古説について」は、本史料の伝来を次のように記述している。『座間古説』原本の成立事情や著者などは不明である。現在4種の写本が伝存しているが、これらは所蔵者の家名をとって飯島本・加藤本・斉藤本・稲垣本と呼ばれている。このうち斉藤本は数奇な運命をたどって『座間古説』が注目される機縁となった。すなわち、この本は斉藤家から借り出した人物が誤って廃棄してしまい、行方不明になっていたが、昭和10年(1935)東京・本郷の古書店に出ていたところを座間・心岩寺の白井住職によって買い求められた。その後、元の所蔵者が心岩寺の檀家である斉藤家であることがわかり、昭和40年(1965)に同家に返還されたという。他の3家の写本は市史編纂の資料調査で所在が判明した。飯島本・加藤本・斉藤本はほぼ同内容であり、稲垣本は明治初期の書写の際にかなり手が増えられたとみられる。翻刻の底本には誤りの少ない飯島本が用いられた。現在唯一の活版本である『座間古説』は、頭注付きの翻刻、解題「座間古説について」、現代語訳、関係地図1枚で構成されている。

内容

翻刻本で27頁の小著。現在の座間市域に当たる近世の5か村(座間宿・座間入谷・新田宿・四ツ谷・栗原)のうち、座間宿と座間入谷を中心に記述されている。社寺の縁起や旧跡の由来など地誌的要素を多く含むが、『新編相模風土記稿』のような体系的記述はされていない。また、古代の伝承から近年の事件や事実まで記事がおおむね年代順に配置されており、座間の歴史を語り伝える一面ももつ。主な内容は次のとおりである。

- ①座間の鎮守・鈴鹿明神の縁起、海老名の有鹿神社との関係
- ②武士渋谷高間の娘・小桜姫の伝説、龍源院縁起
- ③小田原北条氏の家臣団・座間七騎の支配
- ④江戸初期の座間宿形成と各家の由来
- ⑤久世大和守の相模川治水と検地
- ⑥相模野台地の入会地・座間野の開拓をめぐる問題
- ⑦領主の変遷
- ⑧明和3年(1766)の座間宿の戸主一覽
- ⑨座間野の境界をめぐる近隣の村との紛争
- ⑩護王の姫伝説
- ⑪将軍吉宗の日光御社参に伴う軍役の免除
- ⑫円教寺縁起

記述の重複が多く見られ、構成も一貫していないなど、全体に素朴で完成度は高いとはいえない。しかし祭礼の意義や紛争・訴訟の経緯などを記録して地元で役立てようとする熱意が感じられ、民衆によって書かれた史料としての意義は大きい。



史料本文を読む

<翻刻・注釈本>

- 『座間古説』座間市立図書館市史編さん係 1987(座間市史資料叢書1)
[K27.56/2/1]



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆赤石智子「村の中の座間七騎」(『日本歴史』(639)吉川弘文館 2001
[Z210.05/3])